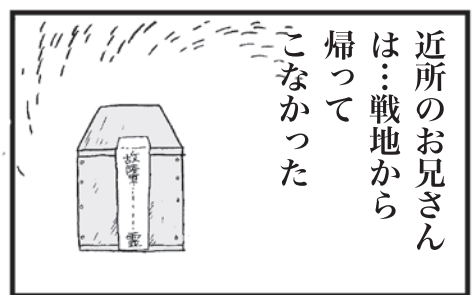
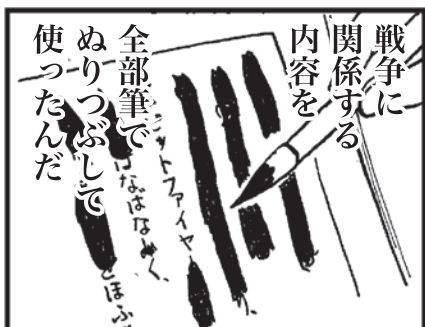
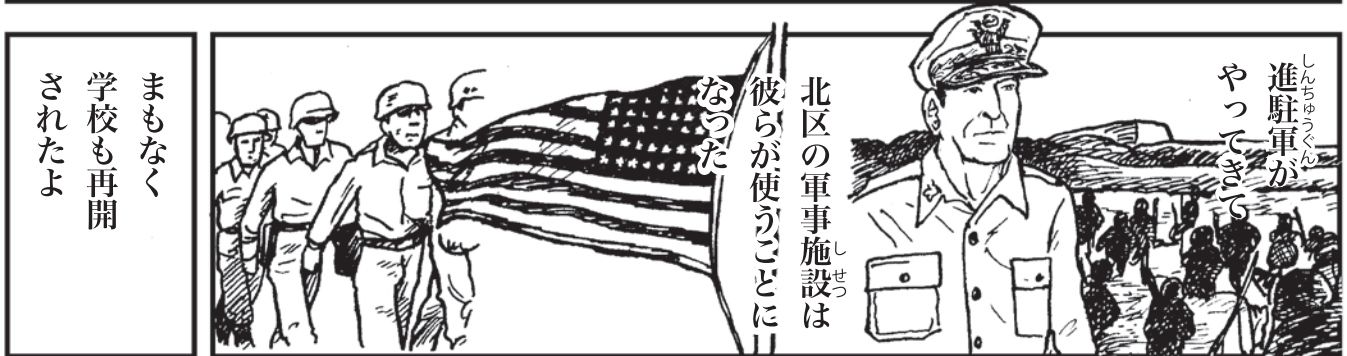
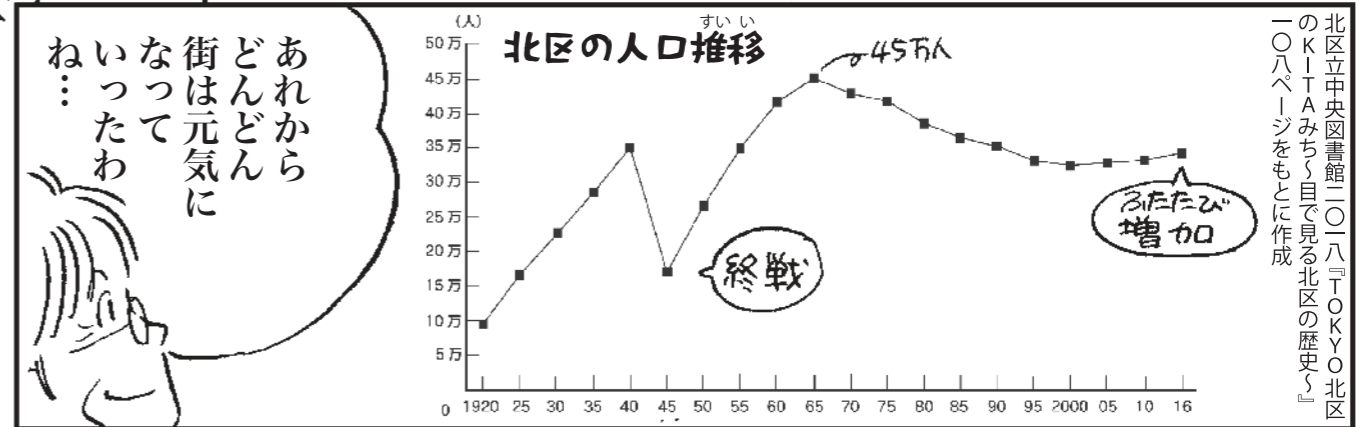
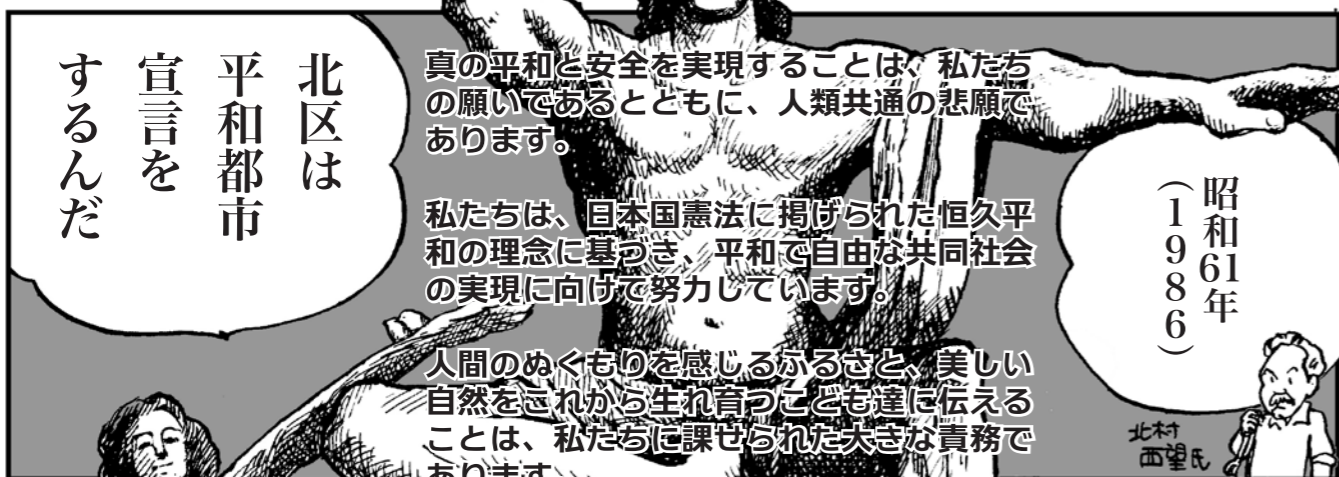
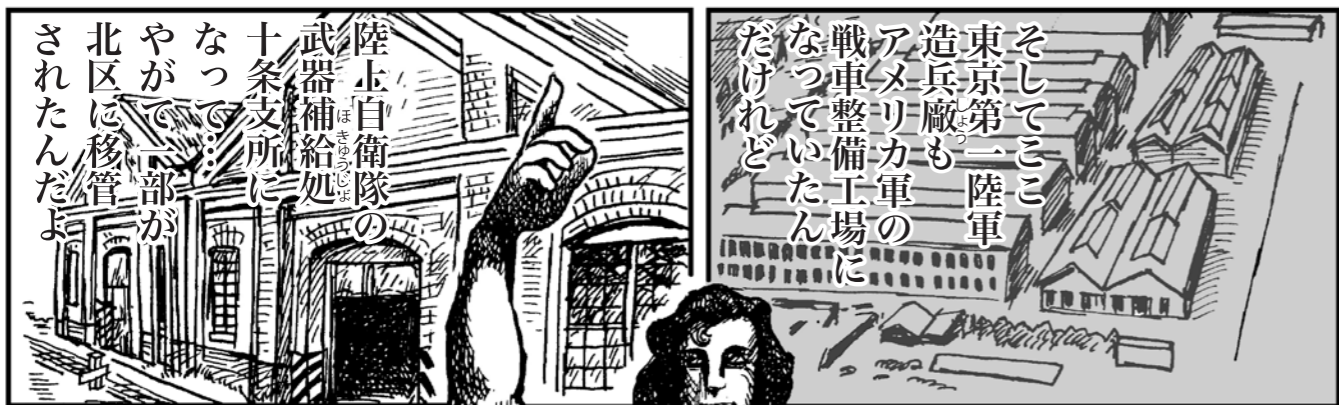
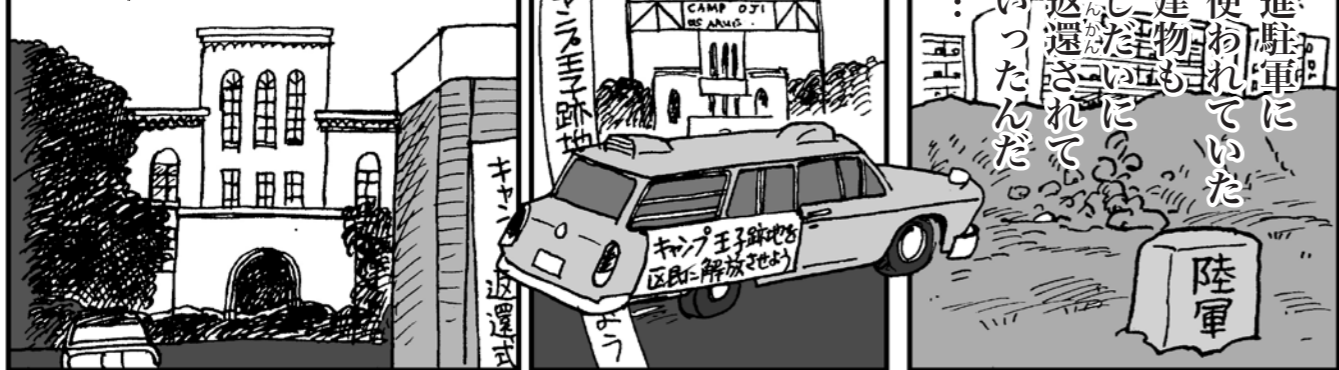


あと
第3章 焼け跡からの出発

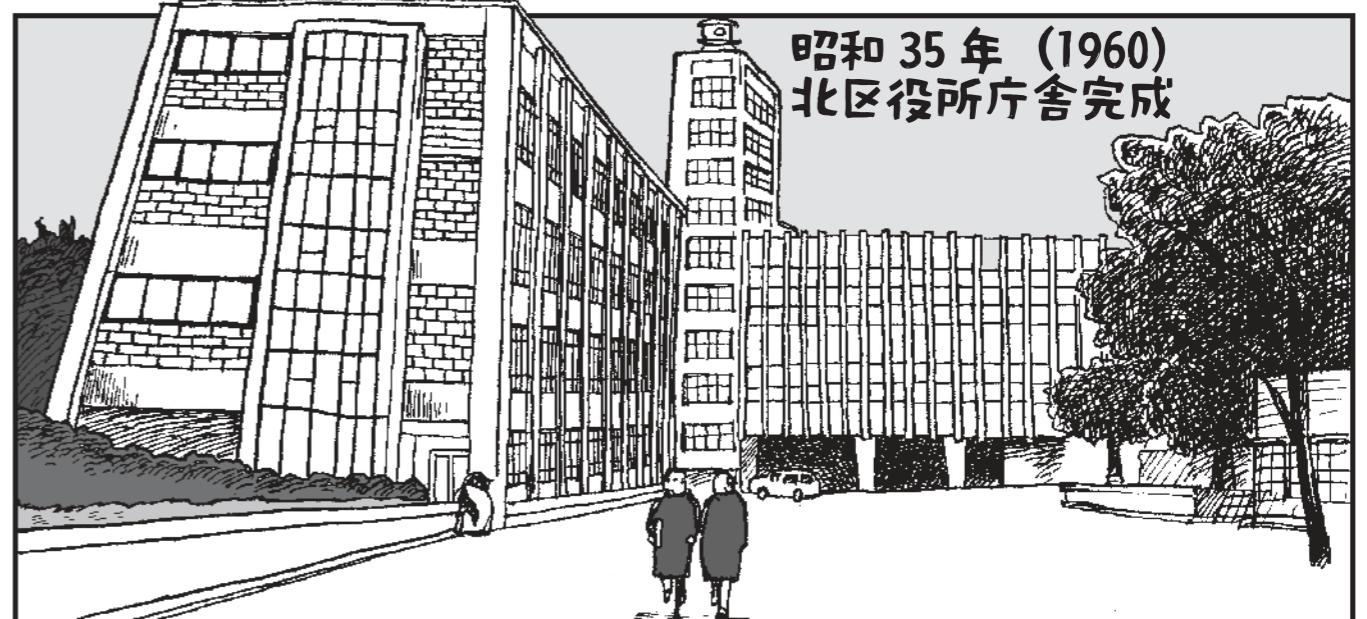
まんがでたどる北区と戦争 第3話



昭和56年(1981)



北区立中央図書館二〇一八「TOKYO北区のKITAみち」目で見える北区の歴史」一〇八ページをもとに作成





戦後の苦しい生活

連日の激しい空襲や広島・長崎への原爆投下を受けて、ついに昭和20年（1945）8月15日、ラジオを通じて天皇が太平洋戦争の終わりを肉声で伝えました（玉音放送）。

ところが、戦争が終わっても戦時中から続いていた物資不足は、さらに深刻になりました。配給制度は続きましたが、配給のおくれや品切れがたびたび起こり、配給だけでは生きのびられないほどでした。当時の滝野川区でも区民に家庭菜園を作るようにすすめたり、食べられる野草の種類を伝えたりしましたが、まったく足りませんでした。

当時は配給以外の方法で米などの食料品を手に入れることは禁じられていましたが、それでも人々は地方へ足を運び、農家から直接買ったたり、手持ちの品物と交かんするなどして食料品を手に入れました（買い出し）。地方への玄関口となる上野駅や赤羽駅は、買い出し帰りの大きな荷物を背負った人びとでも混みあっていました。

また、赤羽駅の東口側には、終戦直後から露店の店が並びはじめ、やがて多くの店が集まるマーケット（闇市）となりました。闇市にはさまざまな物が売られていましたが、値段は日に日に高くなり、人々の苦しい生活は数年続きました。



学校の再開

終戦後、昭和20年（1945）10月ごろから学童集団疎開の子どもたちは東京にもどってきました。しかし、子どもたちが目にしたのは焼け野原になって変わり果てた町でした。

北区内では学校も空襲にあり、半数近くの国民学校が焼失していました。そのため、終戦後はしばらく別の学校の教室などを借りて授業を再開しました。子どもたちの数は年々増えていきましたが、校舎の再建が間に合わず、午前と午後の二部に分けて授業を行う学校もありました。

学校の授業の内容も大きく変わりました。戦争や軍に関する内容はすべてけずられて、民主主義と平和な社会を目指す内容になりました。修身や国史などの教科書は回収され、国語と算数の教科書は戦争に関する部分を墨で黒く塗りつぶして使いました。子どもたちにとって、それまで信じていた内容をぬりつぶすのは、とまどいの多い作業だったことでしょう。

また、戦後の深刻な食料不足から弁当を持ってこれない子どもたちが多くいたため、アメリカ軍や国際連合（国連）からの援助を受けて昭和22年（1947）から学校給食が始まりました。はじめは脱脂粉乳と汁物だけでしたが、その4年後には本格的な学校給食が始まり、子どもたちの成長を助けました。

空襲で焼失した国民学校

国民学校名	備考
王子第三	約四分の三の校舎を焼失（5/25の戦災）
王子第四	廃校となる
王子第五	仮事務所を王子第三国民学校を借りる
豊川	仮事務所を王子第一国民学校に置く
堀船	事務所を王子高等国民学校に置く
下十条	廃校となる
第二岩淵	太子堂で授業
柳田	廃校後復活する
姥ヶ橋	廃校となる
滝野川第一	滝野川国民学校で授業
滝野川第三	
滝野川第四	仮校舎を滝野川東国民学校（現田端中）に設ける校務を区役所とする
田端新町	廃校となる
田端第五	滝野川国民学校で授業
田端第七	廃校後復活する
田端第八	残留児童滝野川国民学校に収容する西ヶ原小と校名変更する
谷端	天理教会で授業

※『北区教育史 通史編』（北区教育委員会）298頁 表VI-11より転記



王子第三小学校 昭和26年（1951）頃
同校は昭和20年5月25日の空襲で校舎の約三分の二を焼失。もとは2階建てだったが、戦後は1階建ての校舎を増築した。



学校給食 昭和26年（1951）頃
子どもたちは脱脂粉乳とパン、皿の半分くらいのおかずを大切に食べている。



終戦翌日の新聞
昭和20年（1945）8月16日 日本産業経済
終戦翌日の新聞には、玉音放送のあと皇居の二重橋前で泣き崩れる人々の姿が掲載されている。



旧軍用地で家庭菜園作り
昭和21年（1946）頃 渡辺 肇氏撮影
食料不足のため赤羽台や桐ヶ丘付近の旧軍用地は家庭菜園として利用された。



代用品のお玉
昭和20年代
さまざまな材料が不足していたため、軍隊から払い下げられた金属のほか、手に入りやすい安価な材料で代用された。

買い出しの女性
昭和21年（1946）頃
渡辺 肇氏撮影
買い出しで得た食料品は警察に見つかったら没収されるので、列車の窓から荒川河川敷に荷物を落として隠す人も多かった。米袋がたくさん落ちていることから「赤羽は米の産地」といわれた。



墨ぬり教科書
昭和18年（1943）
国民学校初等科5年生の後期で使った『初等科国語 六』の教科書。終戦後は大半を墨で塗りつぶすことになった。



引き揚げ者の苦勞

終戦により、海外にいた日本人は帰国をめざしました。兵士や市民など、その数は約660万人にのぼりました。兵士が日本にもどることを「復員」、普通の市民については「引き揚げ」といいます。とくに中国大陸には多くの日本人がいましたが、日本が戦争に負けたことにより、家や畑は現地に残して、リュックサックにつめた荷物を背に、日本を目指しました。とちゅうでおそれたり、捕虜になってロシア北部のシベリアの収容所へ送られ、帰国できずに亡くなった人も多くいました。

必死の思いで日本に帰国することができても、わずかな財産しか持たず、住む家もない人が多くいました。桐ヶ丘にあった陸軍の火薬倉庫（火薬庫）の建物は、昭和21年（1946）から引き揚げ者の住まいとして使用されました。土手に囲まれ、水道もない倉庫建物での暮らしは、苦勞も多かったことでしょう。それでも入居した人たちは、ここを第二のふるさととして「赤羽郷」と呼び、協力しあって生活しました。

昭和32年（1957）から桐ヶ丘団地の建設がはじまり、赤羽郷の住民はだんだんと団地へ移りました。引き揚げ者や復員兵だけでなく、国内でも空襲で家を失った人は多く、住宅不足は大きな問題だったのです。桐ヶ丘団地は20年以上かけて建設され、5000以上の家族が住むマンモス団地となりました。



軍用地の解放と返還

敗戦国となった日本は、アメリカなどの連合国軍によって占領されました。連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は、日本の民主化を目指し、日本軍を解散しました。北区では、日本軍が区の面積の約10パーセントの土地（軍用地）や建物を使っていたのですが（53ページ参考）、赤羽台の軍用地は戦後もなく、学校や病院、住宅地となり、人びとの生活をよこしました。

そのほかの軍用地の多くは、アメリカ軍が管理する東京兵器補給廠（TOD）となりました。赤羽自然観察公園は、もとは日本陸軍の兵器倉庫（兵器補給廠）だった場所で、戦後はアメリカ軍の戦車修理所となりました。また、陸軍被服本廠だった場所は、アメリカ軍人の住宅地となり「赤羽ハイツ」と呼ばれました。アメリカ軍の施設や住宅で働く日本人も必要となり、北区の人びとにとっては新たな働き口となりました。

北区は何度も返還を求め、軍用地は日本に返還されていきました。最後まで残ったのは、キャンプ王子と呼ばれた、いまの中央公園文化センター周辺です。アメリカがベトナムと戦争をはじめると、地元の人たちが反対するなか、昭和43年（1968）に野戦病院が開かれましたが、3年後に日本への返還が実現しました。

軍用地の返還と跡地利用（番号は53ページの図と対応）

番号	日本軍が使っていたところ	アメリカ軍による占領	日本への返還※	跡地のおもな利用
1～5	工兵隊関係		昭和20年代前半	星美学園、都営住宅、病院、中学校、公園
6	陸軍兵器補給廠赤羽火薬庫		昭和20年代前半	赤羽郷、都営住宅→桐ヶ丘団地ができる
7	陸軍被服本廠	TOD 3地区 米軍住宅	昭和33年	赤羽台団地（ヌーヴェル赤羽台）、小・中学校
8	陸軍兵器補給廠	TOD 1地区 兵器補給廠	昭和37年	高校、都営住宅、電話局
9	稲付射場	TOD 2地区 戦車修理所	昭和33年	十条自衛隊赤羽分屯地→赤羽自然観察公園となる
10	東京第一陸軍造兵廠十条工場	TOD 4地区 極東陸軍地図局など →王子野戦病院	昭和20年代 昭和30年代 昭和46年	都営住宅 陸上自衛隊十条駐屯地、中学校→中央図書館ができる 中央公園、都立北療育医療センター
11	東京第二陸軍造兵廠王子工場		昭和30年代	中学校、高校、税務署、警察署
12	東京第二陸軍造兵廠堀船倉庫		昭和20年代	倉庫、学校、民間工場
13	東京第一陸軍造兵廠滝野川工場		昭和20年代後半	都営住宅、病院、四本木稲荷神社
14	東京第一陸軍造兵廠尾久工場		昭和20年代前半	工場、住宅
15	東京第二陸軍造兵廠板橋工場	TOD 5地区 米軍板橋射場	昭和28年	中学校、東京家政大学



キャンプ王子の野戦病院
昭和43年（1968）3月18日撮影
アメリカ国立公文書館所蔵
背後に写る白い建物が現中央公園文化センターの建物です。



TOD 2地区の戦車修理所
昭和30年（1955）9月6日撮影 アメリカ国立公文書館所蔵
左の戦車は修理前、右の戦車は修理後。



引き揚げ時のリュックサック
昭和20年代
引き揚げ時に全財産を詰め込んだリュックサックは、日本に戻ってからは、食料の買い出しでも活躍した。使用することはなくなっても、捨てずに大切に保管した。



赤羽郷で毛布を受け取る引き揚げ者
昭和21年（1946）ころ 渡辺 肇氏撮影
壁に「引揚のみなさんご苦勞様でした」「東京都外地引揚者定着寮」とはり出されている。ここから新しい生活がスタートした。



赤羽郷
昭和20年代 渡辺 肇氏撮影
引き揚げ者は、帰国するとまずシラミ駆除剤を浴び、髪が真っ白になった。倉庫1棟に8～10世帯が暮らした。



シラミ駆除剤 DDT
昭和20年代
引き揚げ者は、帰国するとまずシラミ駆除剤を浴び、髪が真っ白になった。



引き揚げ者に配られたふるしき
昭和20年代
「祝御帰還」と染めぬかれている。日本に帰国できなかった人たちも多かった。



北区の成立と平和都市宣言

昭和21年（1946）11月3日に、あたらしい日本国憲法が公布されました。まだ食べ物や住むところに苦勞し、出征した父や兄を待つ家族も多かった時でしたが、もう二度と戦争はしないことをちかい、あたらしい日本をつくるための、焼けあとからの再出発でした。翌22年3月15日には、王子区と滝野川区がひとつになり、北区が誕生しました。

昭和26年（1951）9月、日本と連合国との間で、サンフランシスコ講和条約が結ばれ、翌27年4月に、7年間におよびる連合軍による占領が終わりました。なお、サンフランシスコ講和条約と同時に、アメリカと日米安全保障条約を結び、アメリカ軍は引き続き日本に残ることになりました。

昭和61年（1986）3月に、だれもが平和で自由な社会をめざして、北区は平和都市であることを宣言します。みなさんも、戦争について学びながら、ぜひ平和についても考えてみてください。

平和都市宣言

真の平和と安全を実現することは、私たちの願いであるとともに、人類共通の悲願であります。私たちは、日本国憲法に掲げられた恒久平和の理念に基づき、平和で自由な共同社会の実現に向けて努力しています。

人間のぬくもりを感じるふるさと、美しい自然をこれから生れ育つ子ども達に伝えることは、私たちに課せられた大きな責務であります。

私たちは、わが国が非核三原則を堅持することを求めるとともに、心から世界の恒久平和と永遠の繁栄を願いつつ、ここに北区が平和都市であることを宣言します。

昭和61年3月15日
東京都北区

中央図書館の開館

赤レンガ部分は、鉄砲の弾の部品をつくる工場として大正8年（1919）に建てられた建物です。北区に残る数少ない軍の建物を保存・活用するため、2年間かけて工事し、平成20年（2008）に北区立中央図書館として開館しました。館内には建物を説明するコーナーやパネルがあります。



中央図書館への工事前の様子

column コラム



13

玉音放送

昭和20年（1945）8月15日正午、ラジオを通して、天皇が太平洋戦争を終えることを国民に伝えました。「玉音」とは天皇の声のこと、放送前夜に皇居でレコード録音されました。前日から、15日正午に重大な発表があるとラジオでくり返し伝えられ、当日はラジオの前で正座をして放送を聞いた人がたくさんいました。その内容は難しく、わかりにくいものですが、国民は天皇の肉声で日本が降伏することを知り、多くの人が涙を流しました。



15

ティーオーデー TOD (Tokyo Ordnance Depot)

敗戦となり旧軍用地は国有地となりましたが、およそ半分が東京兵器補給廠（TOD）という在日アメリカ軍が駐屯して管理する施設地となりました。TOD第一地区は西が丘三丁目、第二地区は赤羽西五丁目、第三地区は赤羽台一・二丁目、第四地区は十条台一丁目、王子本町三丁目、第五地区は十条台二丁目と上十条三丁目の一部でした。これらの土地はだんだんと解放され、最後に解放されたのは第四のキャンパ王子と言われた地区で、アメリカ軍野戦病院が設けられました。廃止運動が高まり昭和47年（1972年）に返還されました。現在の区立中央公園となります。

14

闇市（ヤミ市）

戦争が終わっても、配給制度以外の方法で食料や物資を手に入れることは禁じられていましたが、配給そのものが当てにならなくなっていました。すると、空襲の焼け跡や建物疎開でできた空地などには直接モノを売る露店が集まるようになり、闇市（ヤミ市）と呼ばれました。闇市では配給で手に入らない食べ物や生活用品などが売られており、人々が生活していくためには必要な存在でした。北区では赤羽や王子の駅前に闇市がありました。



闇市から発展した赤羽駅前の商店街
昭和26年（1951）手川文夫氏撮影

16

軍用地解放

旧軍用地の面積は北区の約10%もありました。その半分はアメリカ軍の東京兵器補給廠となり解放に時間がかかりましたが、赤羽の台地側にあった地域は戦後早くに解放されました。星美学園や国立王子病院（現・東京北医療センター）、桐ヶ丘団地などが次つぎにつくられました。また王子3丁目交差点より北東方向の東京成徳大学高校の角までの土地は昭和20年代後半に解放され、都立北高校（現・飛鳥高校）や駿台学園中・高校がつくられました。